

# 釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の  
横顔

□上□

平成二年度釧新郷土芸術賞の受賞者は、絵画の広島克典さん、声楽の菊地江さん、陶芸の安孫子尚江さんに決まった。それぞれの分野で努力を積み重ねながら芸術性を追求する姿勢、そして質の高い作品・演奏―郷土の芸術振興に、今後の活動が期待される。三人の横顔と活動の軌跡を紹介する。

「赤い手袋」が釧路市買い上げ作品に

「赤い手袋」が平成元年度の釧路市買い上げ作品となり、続いて今回の受賞決定。広島さんの仕事を温かく見守ってきた人たちも、心から喜んでいる。昨年秋、ミ

ヤタ画廊で三回目の個展を開いた。展示した作品は二十六点、小品でも一点を描き上げるのに半月から一カ月かかるから、この個展は三年間の仕事を結集したものだ。作品に、重度の身体障害者というハンディはな

い。日本画風の平面的な処理、その中で空間を構成し、無駄を思い切って排除している。そして明るく、温かい。ハツとするような構図もある。その画風は熊谷守一を思わせる。

山本重一さんの勧めで絵筆握る

絵画と出会ってから三十年ほどになる。昭和十六年、釧路生まれ、家業が塗装店だったから、身近に絵を描く人がいた。釧路美術協会

の山本重一さんもその一人。山本さんに勧められ

て、時には手を入れる。自分の絵を描きたいと思いつ

から、その人の影響から抜

けられなかった。自分の絵が描けたと思えるようにな

るまで十年かかったという。

作品は、身体的なハンディからせいせい三十号。釧路市教育長賞を受賞し、会員に推挙された。この時の作品が、平成元年度に釧路市に買い上げられた「赤い手袋」だ。五十七年に初の個展を開いた。

一時期、迷いがあった。作品を見てくれる人がいないではない。しかし、その作品は肉体的にも精神的にも苦悩の産物、そしてそれを感じさせない画面の明るさ―それは、百号の作品に劣らない重みを持っている。

絵を描くことを生きがい

に、広島さんも底抜けに明るい。

## 絵筆に渾身の力

### 無駄を排除した空間構成

太い線を描き、背景を塗りながら、それを細い線に仕上げていく。静物画がないが、時には知人に連れられて風景を見に行く。思うように外出できなだけに、出会う風景

て絵筆を持つようになった。昭和四十年から釧美展、市民展に出品した。

その後、美唄市にある重度身体障害者の訓練所に入所し、三年ほど木彫を習ったが、やはり絵に戻ることに

### 絵画

広島 克典さん

釧路市春日町三の一六



自分の絵が描けたと思えるようになるまで10年かかった―と広島さん



ヤマザキ 君

木崎征夫